
茨の魔王の思い人

タナトスの鎌

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

茨の魔王の思い人

【Nコード】

N8658W

【作者名】

タナトスの鎌

【あらすじ】

別れた彼氏に殺されたと思ったら、生きて豪華な部屋にいた。

なんか異世界でしかも、茨の魔王の城らしい。

え？ 私が魔王の死んだ恋人の生まれ変わりだって！？

前世でお姫様だった女子高生、俺様チックな美形魔王、毒舌で辛辣な狐の執事を中心人物とした、異世界恋愛物！

恋を失った

フツた。

私、秋月^{あきづき} 緋奈代^{ひなよ}は

3年付き合っていた彼氏を、フツた。

悔いはない。あっちが悪い。

「大学入ったら結婚しよう。

これからもこの幸せを続けるために」

なんて、ウザイにも程がある。

アイツは一言で言えば、バカだった。

容姿端麗なアイツと付き合っていた私は、何度となく嫌がらせを受けていたのだ。

それを1ミリも気づいていないアイツにを見て、私はこれ以上ないくらい腹が立った。

寂しくなった。やっぱりコイツは私を見ていない。私が好きなんじやなくて、

“私が好きな自分”が好きなんだ。

私は、アイツに別れ話を持ちかけた。

何度も理由を聞いてくるアイツに、

何度も理由を話す私。

不毛だ。

この上なく不毛だ。

「バイバイ」

そう言いながら私は
その場を離れた。

くそれから何日か経ったある日く

アイツが言ってきた。

「また付き合わないか？」
「はあ？」

別れたことが広まり、やっと嫌がらせが止んできたというのに、何を言うんだ、こいつは。

「君は飽きていたんだろ？ 気分転換はそのへんにして、また付き合おうよ。」

あれだけ話して、まだそんなふうに思っていたのか。怒りを通り越して呆れてしまう。

「あのね、私は、あなたが嫌いになったの。最初は顔がいいから付き合ってたんだけど、そのうち嫌になってきて、その頃嫌がらせまでされ始めて、その嫌がらせへの仕返しに今まで付き合っていただけなの。」

それなのに『結婚しよう』とか言い始めるし。もう私あなたのこと嫌いなもの。

この前、散々言っただでしょ？」

「……して」

「え？」

「どうして！」

叫びながらアイツの手が私の首をつかむ。

「どうして！ どうして！」

そう言いながらアイツが私の首を絞める。
やばい、死ぬ。

「どうして！ どうして！」
白く濁った頭の中で、アイツの声だけが頭に響く。
意識が遠のく。

「どうして！ どうして！」
狂ったように繰り返さる言葉を聞きながら、
私は目を閉じた。

恋を失った（後書き）

タグにもありますが、苦手です。
助言をください。

ここはどこ？あなたは誰？

目が覚めるとそこは薄紫の世界でした。

……前言撤回。目が覚めるとそこは天蓋付きのベットでした。
さきほど目に入ったのは天蓋の布でした。
体を起こすと頭がすっきりしてきた。
よし、現状を整理しよう。

- 1、三年間付き合っていたアイツと別れた。
- 2、アイツが『また付き合わないか？』と言ってきた。
- 3、断った。
- 4、首を絞められ、気を失った。
- 5、ここにいる。

いやいやいやいやいや。

明らかに4、5間が抜け落ちている。
不自然極まりない。

とりあえず、周りを見渡す。

ゴシック調でまとめられた部屋、
豪華だが、けして派手なわけではない。
うん、モロ好み。

この部屋の持ち主とは友達になれそうだ。

さて、ここで扉発見！
さっさとずかるぜ！

ドアノブに手を伸ばした瞬間、執事服を着たキツネが入ってきた。

でかい。身長が私とほぼ一緒だ。

生意気にもモノクルをかけているし。

「何処に行かれるのですか？ 姫君よ。」

しかもしゃべるし。

って、え？

「しゃべった？」

「当たり前でございます。」

「いやいや、全然当たり前じゃないし」

「そんなことはありませんよ、姫君。」

「姫君？」

「ええ、あなたは姫君です。さ、お召し物をお持ちしました。」

いつの間にかテーブルに黒を基調としたドレスが置かれている。それには絡まるようにしてつるバラの刺繍が施されていた。

「お着替えがお済みになりましたら、ベルでお呼びください。」
銀のベルを置くキツネ。

「では、失礼します。つるバラの姫君。」

そう言いながら彼（？）は出ていった。

鍵をかける音を残して。

仕方なしにドレスに着替える。
ピッタリ。

くるりと回ると裾がふんわりと浮き上がる。
まるでおとぎ話のお姫様のよう。

「つるバラの姫君、か」
私はそう呟き、

ベルを鳴らした。

澄んだ音色が響き、
ガチャリと扉が開いた。

「お済みですか？」

と、聞きながらキツネが入ってきたのは、言うまでもない。

魔王様登場

「会見の間までご案内いたします。」

キツネにそう言われて今、やたらと広い廊下in私。

しかし、ドレスって歩きにくいなあ。

明治時代の日本人女性はみんな、こんな格好してたんだよね。
尊敬します。いや、マジで。

歩いて今、5分くらい経ったかな。結構遠い。

「ねえ、あとどれくらい？」

「まだ半分ですよ。」

「え！？」

「回り道をしているので、大体それくらいですね。」

「へえー。」

回り道か、じゃあ、しょうがないよね。

って、ナンデスト？

「何で回り道するの？」

「あちらの世界で長く生活していらしたので、こちらの服に早く慣れていただこうと思ひまして。」

「あちらの世界？」

「あれ？ ご存じなかったんですか？ ここは、あなたがたの世界でいう、異世界ですよ。」

……よし！ 謎は全て解けた！

「これはドツキリなんですね。アイツもグルってわけですか」

「違います。」

「はっはっはっは、もう分かってるんですからね」

そろそろヘルメットかぶったおっさんが看板を持って現れるはずだ
あ！

そうに違いない！

いや、そうであってくれ！マジで！

「さて、つきましたよ。」

でーんと大きな扉。

そこに丁寧に彫られた茨。

ほほお、良く出来たセットですな。

ギィーと重々しく扉が開いた。

カモン！ 仕掛け人！

「よくぞ戻った。我が姫君」

私の期待は裏切られヘルメットのおじさんではなく、椅子に座った
イケメンが私を出迎えた。

どうやらマジで異世界のようだ。もう他に説明がつくことが考えら
れない。

赤色の絨毯の敷かれたゴシック調の部屋。

調度品は豪華な椅子のみという完全に用途の限られた場所だが、
不自然なほど自然にイケメンはその椅子に収まっていた。

で、言うかまず、

「あんた誰」

「忘れてしまったのか？ 私は茨の魔王だよ」

魔王が寂しげに微笑む。

普通の女の子ならクラッとくるのだろうが、

私はアイツでそういう仕草に免疫がついている。

よって、そんなの関係ない。

ずるずると長い服はRPGの魔王そのまんま。
彼と私の間には5メートルほど間があるが、
それでも美形と分かる整った顔立ち。綺麗だ。

アイツが可愛い系というのなら、こいつは美人系だろう。
なんか異常にむかつく。

頭から生えているのは鹿の角だろうか？

少し近づく。

瞳の色は薄茶色で、髪の色は深緑だ。

どこかの深い森を思わせる瞳はまるで宝石のように、
優しげでどこか冷たい輝きを放っている。

さらに近づこうとすると、

「それ以上近づくと襲われますよ。」
なんとも物騒なことをキツネに言われた。

魔王様横暴・この世界について（前書き）

国の名前を変更しました。

茨の国↓草の国
です。

魔王様横暴・この世界について

「何だ。人を獣のように言いおって」

魔王の顔が曇る。不機嫌でも美形ってなんなんですかコノヤロー。

「実際そうでございましょう？ 今朝もご受分で起こしに行くと言っておられましたし、もう少しご自重下さい。」

キツネさん、毒舌ですね。

「自分の恋人を起こしに行って何が悪い」

「姫君にとっては“前世”なのですよ、魔王様。先ほど、仰られていたでしょう？『誰？』と。」
「……………」

沈黙が当たりを包む。それを壊したのは、

「ねえ」

私だった。

重い雰囲気とかマジ無理。窒息死する。

「私は前世でこの魔王の恋人だったってわけ？」

「ええ。」

「それがつるバラの姫君？」

「そうです。」

「もしかして、私がこの世界に呼び出されたのって、魔王のわがまま？」

「はい。」

キツネがきつぱりと言い放つ。

「いや、そこは断言すんなよ」

「素が出ましたね、魔王様。」

これが素か、取っ付きやすそうで何よりだ。
と、何かがプチンと切れた音がした。

「うるさいなあ！」

どうやら魔王の理性だったようです。

「恋人に逢いたくて何が悪いんだよ！ 生まれ変わるまでずっと待
つてたんだよ！」

やっと見つけたと思った来世界の住人だしさあ！
そうするとなかなか呼び出す訳にいかないだろ！？

しょうがないから死にそうになったらこっちの世界に来る術をかけ
て待ってたんだよ！

それでやっと来てくれたんだ！！」

ガタンと立ち上がった魔王に手首を引つ張られ、後ろから抱きしめ
られる。

「もうこいつ俺のもの！ 決定！」

えええええー！！！！

「ちょっと、離してよ！」

「やだ」

魔王が体を押し付けてくる。もがくと余計抱きしめられる。

結局諦めた。満足そうに私の頭に顎を載せてくる魔王。ちなみに彼
と私の身長差は頭一個分くらい。

ニマニマしているのが見なくてもわかる。

「姫君を離して差し上げてください。」

「断る」

「そうですか……では私はこれで。」

「待って！」

キツネが居てこれなのに、居なくなったらどうなることか。
冗談抜きで襲われる。

「なんですか？」

——巻き込まないでくださいよ。——

目がそう言っているが、無視。

「とりあえずこの世界のことを教えてくれない？」

「その状態ですか？」

彼の視線は明らかに魔王に注がれている。

「まあ、別にいいでしょ。」

さて、キツネに教えてもらったことをまとめると、

・キツネの名前はルペク

・魔王の名前はドルン

・この世界には4人の魔王がいて、ドルンはその一人

・他の魔王はそれぞれ、業火の魔王↓イフリート 大海の魔王↓ルサルカ 大地の魔王↓グノーム

・魔王はそれぞれ国を持っており、火の国 水の国 土の国 草の国 とそれぞれ呼ばれている

・月に一度、魔王同士で会合が行われる

・この世界には人間・魔族・タロル族がいる

・タロル族とは少数民族の集まり

・この世界には三つの大陸があり、それぞれ人の陸・魔族の陸・タロル族の陸と呼ばれている

・人の陸とタロル族の陸には共に14の国がある

・ つるバラの姫君は人間の王族の一人だった
・ つるバラの姫君は30年前、病気で死んだ その時17才だった
・ ルペクは魔獣と呼ばれるもので、ドルンが魔力を流したことに
り、

二本足で立ち、歩き、言葉をしゃべるようになった

そのあと私はようやくドルンから解放され、自分の部屋に戻った。

近道をする私の部屋には1分掛からずについた。

ルペクにもう今後回り道をしないようにお願いした。

魔法・魔術について・執事の見解

「どうぞ。」

ルペクが紅茶のようなものをカップに注ぐ。

「ありがとうございます。」

飲んでみると完全に紅茶だ。結構似ているものがあるのだろうか？

「さて、魔法と魔術についてお話ししましょうか。」

「うん」

「主に人間は魔法や魔術を使えません。魔力が少なすぎるからです。しかし、魔力が多い人間も存在します。それほど珍しいわけではありません。」

「だいたい50人に1人ぐらいですね。」

「その人は魔法や魔術が使えるの？」

「ええ。」

「タロル族は？」

「主に使えるものが多いですが、稀に使えない種族もいるようです。」

「

ルペクは私の質問にしっかり答えてくれる。本当にありがたい。

「魔法と魔術の違いは？」

「魔法には属性がありませんが、魔術にはあります。」

また、魔法は主に呪文のに発動します。しかし、魔術にはこれが必要なのです。」

そう言いながらテーブルにコトリと置かれたものは、少し幅の広い指輪だった。

何かの文字のような模様が彫られている。

「これは魔術器と呼ばれるもので、身につけることによって、その力を発揮します。」

魔力を増幅させ、具現化するのです。」

「これにも属性があるの?」

「ええ。これは私の物で、属性は草系の毒です。」

「草系?」

「1人が使える魔術の属性は1つです。魔術器もそれにあつたものが需要になります。」

属性は大きく分けて4つ。火・水・土・草です。その中でも細かく分けられており、

“何系のなんとか”という言い方をします。魔獣は主人の属性に左右されます。」

「ドルンは草系の茨?」

「そうです。ちなみにつるバラの姫君は魔力の多い人間の1人で、草系のつるでした。」

「私は何?」

「調べてみましょう。」

そう言うところへはどこからか水晶玉のようなものを取り出し、テーブルの上に置いた。

「これに触れてみてください。」

言われたとおりに触る。

10秒後、変化無し。

「どうやら、魔力が少なすぎるようですね。」

「そう」

うん、分かったよ。だって私、めっちゃ一般人だし。通行人Bだもん。Aですらないんだよ。

でもさあ、こういうのって普通、びっくりするぐらい魔力が多かったりするものじゃん？

まあ、所詮は通行人Bなんだけどね。どうせ私の人生こんなもんさ。

「どうかしましたか？」

「いや、別に」

完全に負のオーラ全開だと思う。

でも日本人だし、ここは平気だって言わないとね。気にしたら負けなのさ。

「……そろそろ食事にしましょうか。」

「うん」

ルペクも空気を読んでくれたようだ。優しいね。

私たちは食堂に向かった。

——ルペク side——

違う。

この人はつるバラの姫君ではない。

外見はとてもよく似ている。違うのは髪と目の色ぐらいだ。

しかし、最初に寝かせていた部屋を彼女は気に入ったようだった。

あの部屋は姫君が嫌った部屋だというのに。

城全体が黒や薄紫を基調としているのに対して、姫君の部屋は薄ピンクなのだ。

今度彼女を姫君の部屋に連れていってみようか。

どんな反応をするだろう？

人知れず笑みがこぼれる。

魔王様は気づくだろうか？

気づいたとしたら、どうなさるだろうか？

一番いいのは、魔王様が今の彼女を好くことだ。

はつきり言って、つるバラの姫君は、魔王様の外見に惑わされていただけの存在。

最初は拒絶される方がいい。そんな人ほど、中身をよく見ているはずだから。

そして何より、一つの恋に縛られるのは良くない。

人の命は短いものだ。魔王様には、いつまでもくよくよしていただいては困る。

私の主人は、永久を生きる存在なのだから。

魔王について

さて、食堂に行くとき意外や意外、ドルンの姿はなかった。まあ、さすがにあの感じで食事まで一緒にされたら困るから、ちょうど良かったけどね。

「なんで居ないの？」

一応、ルペクに尋ねる。

「今日は茨城の方で食事会がありますので。」
茨城？

聞いてみるとドルンは仕事をする茨城とは別に、この城、ドルン城を自宅として使っているらしい。城二つ持ちって、おい。どこの金持ちだよ。

魔王に会うのにも謁見の間が茨城にあり、会見のまではより親しい者と会うときに使われるそうだってことは私はそのより親しい者ってことか。今世ではあったのは今日が初めてなんだけどなあ。

ちなみに、こっちにいる使用人はルペクと何人からしいと、料理が運ばれてくる。

うん、分かってるよ、分かってはいるんだけどさ。

「ルペクも一緒に食べない？」

「私は執事ですから。」

ほらあ！ 撃沈だよ！

そうだよ、普通。でも日本人は心苦しいんだよ！

で、今に至ります。

料理は大変おいしゅうございました。

フランス料理っぽかった。

もう夜です。分かってます。これからルペク君は自由な時間のはずだって、

でも、聞かなきゃならないことがあるんだ！

「魔王って何」

そう、一番の謎。このドルン城が自宅って言っんなら、家族とかが住んでいるはず。でも、その様子は全くない。

父親や母親までいないって、死んだってこと？

でも、そんな感じでもない。

じゃあ、魔王って何なんだ。

「それは、ドルン様のことを言っておられるのでしょうか？

それとも、魔王という存在について尋ねておられるのでしょうか？」

「分かってるでしょ？」

ルペクは静かに口を開いた

「……私も、それについて魔王様に尋ねたことがあります。

魔王様は気がついたらこの体で、この世界にいたと、仰っていました。

魔王として君臨し、この国を統べる。ただそれだけが、頭にあったと。

この世界の中で魔王という存在は、不老不死であり、

魔術器を使用することなく、魔術を発生できる者であり、

呪文無しで魔法を操る者であり、

その頭に角を抱く者であり、闇の属性を持つ者です。」

「闇？」

ありがちすぎる。でも、漠然としすぎて逆にわかりにくい。

「魔王様は全てを吸い込むことができます。」

ああ、ブラックホールの的なものでしたか。

「他にもいろいろあるようですが、詳しくはご本人にお尋ねください。」

「はい」

部屋に戻って、ネグリジエに着替える。

本当は元のＴシャツと短パンがよかったんだけどな。

まあ、しょうがないか。

さて、寝ますかね。

魔王について（後書き）

次回、急転回！
の、はずです。

夜の一幕（前書き）

間が空いた上に全然急展開じゃないです。
申し訳ない。

夜の一幕

……やばい、眠れん。

まあ、当たり前だよな。

2時寝3時寝は当たり前だったし。

部屋をぐるりと見渡すと、本棚があったので、とりあえず、読書でもすることにした。

『魔四国の詳細』

うん、これにしよう。って、まてまて。

日本語！？

そういえば普通に言葉も通じてるし、やっぱりこれはドツキリなのか？

いや、でも、ルペクは狐だし喋ってるし、異世界なんだよね？

まあ、読んでみるか。

『魔族の住む陸は俗に魔界と呼ばれ、四つの国が……』

はい、日本語。完璧、日本語。

他の本も同じように日本語で書かれている。

訳分からん。まあ、便利だからいいか。

ダラダラ本を読んでいると、ノックの音がした。

ドアを開けると、ドルンが立っている。

「入ってもいいか？」

「どうぞ」

部屋に入った彼は椅子に腰を下ろし、真剣な顔でゆっくりと口を開いた。

「まずは、いきなりこの世界に呼び出してしまつて、すまなかつた」
「いや、呼び出されてなかつたら100%殺されてたし。その件に
関しては全く謝られる筋合いはないよ。むしろお礼を言いたい。」
「そうか」

ドルンは少し穏やかな表情になつたかと思うと、真剣な顔に戻つて
こう言つた。

「元の世界に帰りたいか？」

「えっ」

私が小さい頃に両親は離婚した。今まで面倒を見てくれた祖母も他
界し、今はアパートで独り暮らしだ。

友達も友達というより、つるんでいただけだし、そいつらもあいつ
と付き合うことによって、離れていった。

うわっ、驚くほどの未練の無さ。むしろこっちに来てよかったか
も。

「無いね。強いていえば、白米くらいかな」

「ハクマイ？」

「気にしないで。ただの日本人の心だから」

「それは気にしたほうがいいんじゃないか？」

「いや、ただの死ぬほど美味しい穀物だから」

「未練あるだろ！死ぬほどうまいって言つてる時点で！」

ドルンが何か怒鳴っている。

あーそれにしても白米食いたい。白米白米白米白米白米

「やっぱ未練あるわ。白米に」

「自分の故郷に対しての未練が穀物のみっていうのは、どうかと思
うぞ」

なに！ 貴様！ 白米を愚弄する気か！

「友人とか、そういうのは居なかったのか？」

「ドルンはどうなの？」

「他の国の魔王だな」

「そう。私にもね、居たんだよ、友達とも呼べないようなのが。まあ、すぐに離れていったけどね」

「……頼むから、そんな悲しそうな顔で微笑まないでくれないか？」

「あれ、そんな顔してる？」

私がそう聞くと、ドルンは静かに頷いた。

「分かった。気をつけるよ」

「そうしてくれ」

ふう。と、ドルンは息をついて、立ち上がると、

「何か、気を付けて欲しいことはあるか？」

と、聞いたので、私が名前で呼んで欲しいというと、分かった。と笑いながら言った。

眠り姫（前書き）

緋奈子が召喚されて目を覚ます前の話です。
ドルン視点です。

眠り姫

ガチャリ キイ

思いの外大きな音を立てて扉が開く。

心臓に悪すぎる！

そんなことを思いながら、俺は部屋に足を踏み入れた。

小さな寝息を立てながら眠っているのは、俺の恋人の生まれ変わりだ。

召喚の反動によって、だいたい2、3日は眠りっぱなしになるらしい。

ベッドに人形のように横たわっている姿は、まさに生き写しだった。ただ、違うところがあるとすれば、それは髪の色だろう。

前の彼女は日光のような金髪だったのだが、

今世では、夜のように艶やかな黒色だ。

目の色も、青空のような水色ではなく、

宵闇のような黒色らしい。

「アリル」

名前を呼んでみる。

全く反応がなく、相変わらず眠り続けている。

溢れるような黒髪に手を伸ばす。

ふっと手を止める。

このまま触れれば、霧のように消えてしまうのではないか——
そんな考えが頭に浮かんだからだ。

くだらない。

俺は苦笑しながら、その髪に指先を差し込んだ。
絹のような感触が心地いい。

それにしても髪をいじられているというのに、全く起きる気配がない。

召喚の術とはそこまで負担がかかる術なのだろうか。

「ん、ん」

姫君が小さく声を上げる。

「どうした？」

へんじはない。どうやら、ただ唸っただけのようだ。

俺はがっかりしたが、同時に安堵もしていた。

もう少しだけ、眠り姫のままでいい。

うつすらと笑みをたたえるその唇から、聞きたい言葉がある

「会いたかった」

そう聞きたい。

しかし、同時に恐れてもいる。

黒い瞳が俺を捉えて、その唇が言葉を紡ぐのを。

「誰？」

そう聞かれたら、俺は……

小さく体が震える。

いや、問われるだけならまだいい。

もし、悲鳴を上げられたら。

人である彼女にとっては、異形でしかないこの姿を、
恐れ、虐げられたりでもしたら。

不安が大きく膨らむ。

このままだと、身動きが取れなくなりそうだ。

「大丈夫だよな？」

姫君は答えない。だが、それでいい。

「一緒にいてくれるよな？」

楽しかったあの頃のように、また彼女は、無邪気な笑顔を俺に向けてくれるはずだ。

そつと、髪に口を付ける。

覚えていなくてもいい。帰りたいなら帰らせてやればいい。俺だって忘れることはある。なら、思い出させればいい。

思い出せば、一緒にいてくれるはずだ。

「大丈夫だ」

フツと笑みを浮かべる。

と、背後でガチャリと扉が開いた。

「まーおーうーさーまー？」

そこには殺気立った執事がいた。尻尾をフォンフォンと揺らし、不快の念を露わにしている。

「言いましたよね？ 下手に刺激を与えると、

目覚めたとき姫君がご病気になられるかもしれないから、私が同行している場合以外はこの部屋に入らぬように、と。」

「ああ、だが、つい……」

「しかも、お仕事もほったらかしにしていますよね？ 宰相様が困っておいででしたよ？」

「ああ、すぐ戻るから少し待ってくれ」

「今すぐにです！」

何か言おうとしたが、止めた。

下手に神経を逆なですると、本気で怒られかねない。

「分かった」

名残惜しいが、俺はなるべく音を立てないように、扉を閉めた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8658w/>

茨の魔王の思い人

2011年11月11日13時51分発行